

JO Kanamori

Sawako Iseki

Noismは集団として、  
その覚悟を問う方法論を  
見つめ直さないといけない。

### 金森穂

Noism 芸術監督／りゅーとひあ舞踊部門芸術監督  
舞踊家、演出振付家。17歳で単身渡欧、モーリス・ベ  
ジャール等に師事。オランダの NDT2 在籍中に20歳  
で演出振付家デビュー。10年間欧洲の舞踊団で活躍  
後帰国。04年、りゅーとひあ舞踊部門芸術監督に就任  
し、日本初の劇場専属舞踊団 Noism を立ち上げる。

### 金森穂のリアリティ

— 14年目になる Noism が、今このタイミングで初期の代表作である『NINA – 物質化する生贋』(以下『NINA』) を再演するに至った経緯を教えてください。

これからの Noism を考えたかったからです。そのため、メンバーそれぞれの身体性の強度が、今どのくらいのものなのかを体感したい。だから、Noism の身体的規律である「Noism メソッド」を確立するきっかけになった『NINA』を再演しようと決めたんです。『NINA』を圧倒的な強度で踊れる集団でなければ、Noism として集団活動する意味はない。この機会にちゃんと見つめてみようと思いました。

— それは Noism が転換期を迎えるということでしょうか？

それはあります。13年続いているのに、逆に転換期を迎えない方がおかしい。だからこそ今、この13年という歳月をかけて Noism はどこに辿り着いているのか。何が初演当時の強さで、何が今現在の強さなのか。『NINA』を通じて見てくるし、見る必要性を感じました。そもそも舞踊家の覚悟を、これだけシンプルに問うような作品は他にないですから。お客様にもメンバーそれぞれの舞踊家としての生き様がダイレクトに伝わるだろうし、金森穂が求めている身体性がわかる。ついでに「本当にスバルタなんだな」と、気づかってしまうでしょう。

— 舞踊家とは本当に、観る者にとっての「生け贋」ですね。

そもそも踊っている自分を舞台上で人に晒すなんて、舞踊家とは本当におかしな存在ですよね。舞台上で極限まで踊って、死にそうになればなるほど観客のみなさんは喜んでくれるんですから。もちろん、そうではない舞踊家もいます。ですが、舞踊家・金森穂としてのリアリティは、人間の限界=死に、いかに近づくか。そこでしかないんです。自分が踊っていてすごく楽しいとか、気持ち良かった瞬間に褒められたことなんて、人生に一度もないですから。それはずっと搖るがない事実。だから生け贋なのです。そのために極限まで死に近づけるように徹底して体を鍛えるし、技術を磨くし、表現を突き詰めるし、稽古をするんです。死に近づけば近づ

Noism Interview

# 金森穂と井関佐和子、 『NINA – 物質化する生け贋』を通して、 Noismの“今”を見つめる。

くほど、その瞬間、生きるために。

— その瞬間を、Noism という名の集団で追い求めていたんですね。そうです。舞踊家が舞台の上で完全に生きること。その極限状態を舞踊家としても芸術監督としても私は求めているので、Noism ではそこなどり着くための環境、作品をつねに創ろうとしています。もちろん、作品によってテーマやメッセージは変わります。でもそれはあくまで装飾の部分であって、根底にあるのは極限状態を作ること。極限まで追い込んで追い求めて……、それを集団として他者と共有していくのは非常に難しいことなんです。でも同時に追い求めないと、舞踊家として見てこない風景があります。

— 極限状態に置かれている身体を差し出す。舞台とは本当に残酷ですね。

残酷ですよ。人は目の前にある物質に対してデザインが美しい、美しくないと言うでしょう。舞台ではそれを人間に言うわけだから、非常に残酷な世界です。でもそんな世界に生きている以上、「作品が面白い」という次元ではなく、プロとしての身体感覚や強度を突き詰めていかなければいけないんです。しかも、Noism は日本で唯一の公共劇場専属舞踊団。「日本の文化芸術として、舞踊のプロフェッショナルたちの生活が保障されているのは、当たり前じゃない?」と思ってもらうために、立証していくかなくてはいけません。

— 13年という活動の軌跡が、それを立証していると思います。

Noism 全体を通して、個々の技術的には上がっていますし、実際メンバーはよく踊っています。さらに上に行くためには、それぞれの覚悟にかかります。テクノロジーの進化によって、いろんなことが器用にできる時代だから、死ぬ気で覚悟するようなものは、芸術に限らず今はあまり求められていません。それにはインターネットもひとつの弊害になっていると思います。ネット社会によって、それまで内側に抱えていたものがすべて陽のもとにさらされていく。人間の影までもが露呈してしまっているんです。つまり立体感が世界に生まれにくいんです。そういう社会のなかで Noism は集団として、その覚悟を問う方法論、あるいはトレーニングを改めて見つめ直さないといけないと思っています。

— 個が問われるこの時代に、集団であることの意味とは？

集団という言葉を私自身がよく使いますが、前提として、個か集団か、ということではないのです。そもそも個の集合体が集団だから。ゆえに集団でいることが個性には繋がらないし、集団が先立ってはいけないんです。深さを持った個が集まって、より強い集団ができる。そういう意味では私自身、個としてもっと刺激を受ける必要があります。私は今年で43歳、Noism も15年目に近づいています。そういった様々な要素を踏まえると、このタイミングで『NINA』を再演するのは必然だったように今は思います。

## 舞踊家の覚悟

—『NINA』初演のオリジナルキャストであり、Noism 作品には欠かせない存在と言える井関さんですが、今回は出演せずにリハーサルディレクターに徹した理由を教えてください。

今、私は舞踊家として転換期を迎えてます。集団として活動するなかで13年が経ち、Noism メンバーの世代もだいぶ若くなっています。そういう環境のなかで、井関佐和子という舞踊家は、年齢や経験とともに集団の中のひとりとしては存在しにくいところがあるんです。例え私がどんなに集団のひとりであることを望んでも、周囲の人たちは、なかなかそう見ない。あるなら、どうしていくべきなのか。それはここ数年、考え続けていることでもあるんですが、そのひとつの選択として、『NINA』はリハーサルディレクターとして参加することにしたんです。

— Noism 副芸術監督として、舞踊家として、決断されたのですね。もちろんすごく迷いました。自分が出演することで、100% の舞台を引き出したい、他のメンバーをより超越した舞台に連れ出したい、という自我は今もあります。でも同時にこれから Noism を担う若いメンバーたちには、より個々が生きた舞踊家になってもらいたい。それは集団である以上絶対ですし、私自身、それをディレクターとして支えたいと思いました。私の転換期は Noism の転換期でもあるんですね。そういったなかで『NINA』を今ここでやることは、とても良いきっかけを作れるんじゃないかなって。芸術監督の金森穂が求める身体性が一番明確になっている作品だから。個々の強度や深度も明かされるし、試されると思いました。

—『NINA』は「Noism メソッド」の出発点にもなった作品です。穂さんの作品は、ひとつひとつコンセプトががらっと変わるので、そのつど舞踊家の身体性も、大きく切り替わって見えるかもしれません。でも実はこの『NINA』が携えている身体性は、どの作品にもすべてつながっているんです。だからメンバーには表面的な踊りの型だけをなぞるのではなく、型の奥にある本質を自分でつかみ取って欲しい。そのためには舞踊家としての深度が必要なんです。「集団には強さがある。個人には深さがある」。これは演出家の鈴木忠志さんが言った言葉なんですが、まさにその通りで、みんなで同じ方向を見て進むことができる Noism は、集団の強さはあります。そこは胸を張って断言できることですが、ただ、個々の深度という点ではもっと深くなるはず。今の Noism にとって、深度をどう掘り取っていくのかが課題なんです。

— 井関さんは Noism の筆頭舞踊家として、そこをどう乗り越えていったのでしょうか？

舞台で生きることを本気で欲するかどうか、それが明らかになる作品です。

## 井関佐和子

Noism 副芸術監督  
舞踊家。1978年高知県生まれ。3歳よりクラシックバレエを始め16歳で渡欧。04年より Noism 結成メンバーとなり、金森穂作品において常に主要なパートを務め、日本を代表する舞踊家のひとりとして、高い評価と注目を集めている。

人には絶対に負けたくないという気質は、一番強いと思います。例えば舞台で一列に並んだときに、他の舞踊家よりも一步前に自然と出てしまう気持ちです。そういう気持ちがいざというときに結構重要になってくるんですよね。あとは覚悟です。Noismに入団して、初演の『NINA』を踊った後から少しづつセンターを任されるようになったのですが、ある瞬間から褒め言葉以外、なくなってしまうんです。逆を言えば、自分が少しでも失敗しようものなら、さげすまれてしまう。すべてを背負ってるんだ、というプレッシャーのなかで、舞踊家としての覚悟ができたんだと思います。『NINA』の海外公演では、それをいやというほど痛感させられましたし。そういった私の経験を踏まえてみても、舞踊家としての覚悟を持つには、『NINA』はもっとも適した作品だと思います。その覚悟が自ずと深度になるから。

— 井関さんにとって、覚悟とは何を指すのでしょうか？

踊る本人が舞台で生きることを本気で欲するかどうか。それにつきますね。今のメンバーはものすごい理性を働かせて、誠実に踊っています。ただ私は、もっと怖がらずに、死ぬ気で自分の野性も含めたすべてを出し切って欲しいと思っています。それが舞台で生きるということだから。技術は教えられても、覚悟だけは教えられるものではないんですよね。自分でするしかない。そこを今回、期待しています。『NINA』は何の飾りもない、生の身体から発せられるエネルギー、舞踊家の魂を感じることができる作品。そのためにも、メンバーにはその瞬間を生きて欲しい。『NINA』を通じてこれまでの Noism が見えてくると思います。